

ばつくとどうぞばすと その四六

街路名の変遷が語るフランクフルト。 ユダヤ人の歴史

ドイツの街を歩いていると歴史を想起させる街並みやモニュメントに出会うことはよくある。もちろん日本でもそれはよくあることで、彦根においても歴史を一つの文化資源として現代に生かす取り組みが行われている。そうした歴史遺産を目の当たりにすることで、私たち現代人は歴史に後押しされた豊かな存在であるとの気持ちを抱く。だがそこに本当に現代と過去との対話が存在しているかはすぐには問われない。

ドイツとヨーロッパの金融センターの一つであるフランクフルトは、ユダヤの人々と密接な歴史の繋がりを持っている。近代以降の世界金融に影響を及ぼしたロスチャイルド家や『アンネの日記』で知られるアンネ・フランクもここで生まれた。宗教的な理由からユダヤ人（教徒）差別が生まれた歴史を遡ると、すでに一五世紀中頃までにはこのフランクフルトでもゲットー（ユダヤ人居住地区）が市壁東側縁に建設され、そこには礼拝堂（シナゴーク）や市場がつくられ、ユダヤ人は一定の自治権を得ていた。一九世紀になるとフランス革命の影響を受けた市民的自由の

思想と、旧来の秩序を背景にしたドイツのナシヨナリズムの流れに挟まれて、ユダヤ人たちは一方で宗教的な自己同一性と、他方でドイツ社会との共生を目指し、差別の対象とされながらも、ともかく国民国家の一員として同化し同権を求めた。詩人ハイネやジャーナリストのベルネは、苦悩と葛藤のなかで改宗し解放運動の先頭に立とうとした人々である。ワイマール共和国時代の一九二五年には、フランクフルトの人口約五万人のうち、ユダヤ人は約五・五%の三万人弱となっていた。そしてその後、一九三三年から四五五年までのナチ支配下でユダヤ人迫害が始まった。すでに十九世紀末までに取り壊されていたゲットーは第二次大戦によって痕跡を失っていたが、戦後一九八七年の工事の際に建物跡が発見され、大論争のあと、今では一部が復元され、跡地にはユダヤ人街博物館や追憶の場所が建てられている。

フランクフルトの歴史遺産とこの博物館などについては、ちょうどNHKテレビ「旅するドイツ語」テキスト今年三月号に紹介記事が掲載されているので詳細はそちらに譲るとして、その建物の裏手にあるのが写真の街路標識である。ふと出会って歴史を想い描いた。さりげなく立つ五本の標識が語ることは、右手前から、この街路名が一六世紀から一八八五年まで「ユダヤ人市場」であり、次にその後ユダヤ人解放に尽力したジャーナリストに因んで

「ベルネ広場」と改称され、一九三五年からナチズムの反ユダヤ主義によって「ドミニカ広場」となり、戦後一九七八年によく「ベルネ広場」の名を復活させ、工事終了後、一九九六年からは「新ベルネ広場」の名称を生んだことである。五つの標識は、ドイツの歴史のなかでユダヤ人がいかなる位置を占めていたかを何と雄弁に物語っているだろうか。

それとともに、ここにたたずむと、ここに生活した人々との対話が浮かんでくる。昨年アンネ・フランク誕生九〇年であった。ここユダヤ人街博物館で開かれた記念行事でも、彼女がナチに見つかる約四カ月前の一九四四年四月十一日、アムステルダム隠れ家で日記に記した言葉が語られた。「わたしがわたしとして生きることを許してほしい」（深町眞理子訳、文春文庫）。危うく発見されそうになった日の晩、一個の独立した人間として勇氣と正義を持って人生に立ち向かおうと誓った十四才の言葉は、現代の人々に歴史の営みの積み重ねのなかで生きていく意味を考えさせる。このところ、新型コロナウイルスの感染拡大で容易に街歩きなどできない事態に陥ってしまったが、そうしたなかで、アンネが置かれた非日常の「生活」を想起しつつ、この言葉を新入生とすべての学生・院生のみなさんに贈ります。

（経済学部 三ツ石郁夫）



フランクフルト街路名の変遷はユダヤ人の歴史を示す（筆者撮影）

古今当在



首里城の「色」について

昨年一〇月三十一日未明、沖縄県那覇市の首里城正殿から火災が発生しました。その翌朝、正殿は元の姿をとどめることなく焼失し、周囲の建物も被災したというニュースを見て、衝撃のあまり絶句したことを思い出します。あの首里城正殿は、琉球という国が健在だった一七六八年に改修された時点の姿を復元したもので、その壁はあざやかな朱色で彩られていました。しかし本館所蔵の「琉球貿易図屏風」では、正殿の壁の色は黒です(写真参照)。

さて、今年二月頃に春季展示の企画を考えていた時、南田孝子助手から「その点は観覧者の方からも質問されることがあります。琉球貿易図屏風のほかにも黒い正殿が描かれた絵画資料がありますから、それらの写真を並べて比較しながら、首里城の色について考えるというのはいかがでしょう」と提案を受けました。

そこで調べてみたところ、以下のようなことが分かりました。『沖縄県史 図説編 前近代』(二〇一九年三月刊)によれば、首里城正殿が描かれている絵画資料には「首里那覇港図屏風」(沖縄県博物館・美術館蔵、一九世紀)や「琉球交易港図屏風」(浦添市美術館蔵、一九世紀)などがあり、確かにそこでも正殿の壁

は黒くなっています。しかし、現在まで伝わる絵画資料はほとんど一七六八年以降の作ですが(琉球貿易図屏風も一九世紀の作)、正殿についてはむしろそれ以前の、一八世紀初頭の「首里城古絵図」などに近い形で表されているケースが多いようです。

つまり、琉球貿易図屏風などの中の正殿は当時の実態に即して描かれている訳ではなく、壁の色についてもそこから具体的な情報を得るのは難しいということになります。これら絵画資料の制作にあたり、琉球の絵師たちは先行する絵図での首里城を模写・踏襲し、さらに独自の表現も加えられた結果、実態とは異なる形や色の正殿が描かれ続けていったと考えられます。

その後、春季展示については、近代以降に撮影された首里城の写真や年代順に並べるコーナーを設けることになりました。この企画は春季展示が映像のみ公開となったため実現しませんでした。ですが、ここからは展示の準備段階で調べた内容に基づいて、近代以降の首里城がたどった歴史と正殿の色についてお話しします。

まず、こうした写真を通じてであれば、琉球時代の正殿の色を知り得るでしょうか。それもやはり難しいと言っほかありません。なぜなら当時の写真はモノクロであり、さらに明治一二年(一八七九)に最後の琉球国王・尚泰が首里城を退去し、琉球という国が滅亡して以降の事情が重なってくるからです。

主を失った首里城は急速に荒廃したようで、明治二十七年には「正殿ハ所々壁已(すで)ニ剥ゲ、屋舎枯(朽)チテ甚ダ不潔」

であったとする記録もあります（那覇市歴史博物館蔵「沖縄県修学旅行日誌 全」）。すなわち現在写真で確認できるのは、色や形が相当変化してしまった後の正殿の姿だということです。

大正一二年（一九二三）、老朽化した首里城正殿の取り壊しが一度は決定されますが、鎌倉芳太郎や伊東忠太らの尽力により一転保存となります。そして大正一四年に正殿は沖縄神社拝殿として特別保護建造物に指定され、昭和三年（一九二八）から解体修理が行われ、同四年に国宝となりました。つまり、正殿は神社の一部として保存されたのです。そのため当時の正殿の写真を見ると、建物の前に石灯籠が立ち、内部には賽銭箱も置かれています。

この昭和の大修理の際、正殿の外壁には朱色ではなく古色塗（墨塗）が施されました。これは、修理で補った新材の色を古材の色に合わせるためであったということです。なお尚泰の曾孫であった井伊文子さんは、「夕づく日足場かかれる正殿の古りにし壁にあかあかと照る」という歌を詠んでいます。井伊さんは当時東京で暮らしていましたが、沖縄へ帰省した折りに、修理のため周りに足場が組まれた正殿を目にしたようです。

そして昭和二〇年（一九四五）の沖縄戦により、首里城は跡形もなく壊滅しました。首里城が米軍による攻撃の標的とされたのは、その真下に日本軍の第三二軍司令部が築かれていたためです。この戦争によって、昔の正殿の姿を知っていた人々が大量になくなり、首里城に関する歴史資料も多くが灰燼に帰しています。

戦後の首里城復元事業は、圧倒的に手がかりが少ない状況から

出発せざるを得ませんでした。それでもヒアリング調査では、昭和の大修理に関わった人物から、正殿の柱の一部にベンガラが残っていたとの証言が得られています。さらに一七六八年の正殿改修について記録した古文書からは、正面唐破風の柱など建物の重要部分が赤系統の色調であったことも判明しました（ただし、かつての壁の色を特定できる古文書などは発見されていません）。

こうした調査研究を経て、正殿の復元にあたっては壁を朱色とすることに決まりました。完成した正殿が一般公開されたのは平成四年（一九九二）で、沖縄戦から実に四七年もの歳月が流れていました。首里城とは、沖縄の戦後復興のシンボルでもあったのです。それが昨年焼失したことが、沖縄の方々にとれほどの悲しみをもたらしたのか、察するに余りあります。

いずれ正殿は再び復元され、我々に美しい姿を見せてくれるはずです。その時までには、二度と火災を起こさない管理体制の構築とあわせて、首里城の歴史的な姿をめぐる調査研究がさらに進展していることを期待しましょう。（史料館専任教員 青柳周一）

二〇一九年一〇月から二〇二〇年三月までの史料館の動き

◇展示

企画展「八幡で商う 八幡で暮らす」

一〇月二二日（月）～十一月二二日（金）

◇史料整理

一圓奈太夫家文書（多賀町）・古保利村文書（長浜市）

発行 滋賀大学経済学部附属史料館 TEL 0749-27-11046

<https://www.econ.shiga-u.ac.jp/shiryo>